

■編 集 後 記■

★『連句年鑑令和元年版』をお届けいたします。

★作品のページは全国のグループ作品が一四二巻、昨年から始めた「個人の作品」が一二巻、「学生の作品」は三つ物を含め六四巻を掲載しました。

会員個人が捌いた作品の募集については、「会報・連句」10月号と12月号に応募案内を載せています。グループの枠を越えて巻いた作品等、一個人一巻です。応募の条件は日本連句協会会員に限ります。応募料は三千円（発行と同時に「連句年鑑一冊送呈」としました。皆様どうぞふるってご応募ください。

★巻頭には「実践報告・連句で遊ぼう！」と題し、20年以上に渡って、中学校の国語の授業で連句を指導してきた宗我部義則氏にその「指導方法」を執筆して頂きました。氏には今年三月の「日本連句協会総会」でも講演を頂き、如何にして「連句の面白さを伝え、生徒の発想を引き出していくか」を述べて頂きました。この実践報告がこれから学校で連句指導をなさる先生方のレジュメになつて欲しいと願っています。私達連句人が新しく人を誘うときの目当てにもなります。読み物としても、指導書としても役立つと期待します。

★エッセイには日本連句協会会員のお二人に、日頃から連句について深く思慮しておられることについて筆を執つて頂きました。

★小池正博氏は「非懐紙」の面白さについてです。連句を巻くための種々の式目から抜け出していくことができるのか。連句人は悩むところですが、「非懐紙」を考案した橋岡石氏を章立てにして分析し、「自由な詩精神が形式と軋む」域に達することが論じられています。一読者としては、真似しながら（学びながら）実行できる資料を示して頂いた気がします。

★大野鶴士氏は各務支考の「七名八体」論が連句の「転じた付け方」に活かせるかと分析しています。歌謡曲も七名八体で分析出来るという章には納得せざるを得ません。捌きと連衆がこれを共有して相互理解できれば、納得しあつて一卷を進行できる、と思えました。「連句年鑑」で読みました」が合い言葉になつて欲しいと願っています。

（大久保風子）

令和元年六月二十五日 印刷
令和元年六月 三十日 発行

令和元年版 連句年鑑

定価 二、五〇〇円

編集人代表 大久保 風子

発行所 〒194-0203 町田市図師町一三三三-一八

高尾方

一般社団法人 日本連句協会

電話 〇四二七九三―三九八四

公式サイトアドレス

<http://renku-kyokainet/>

印刷所 〒336-0021 さいたま市南区別所三二―一〇

関東図書 株式会社

電話 〇四八―八六二―二九〇一

FAX 〇四八―八六二―二九〇八